

文化論集第59号
2021年3月

消 息

原口厚先生のご退職にあたって

原口先生と書くのはどうも落ち着きません。私にとってはやはり原口さんなのです。私が第一文学部で2年生の時に受けていたドイツ語会話の授業に、一人だけドイツ人の先生と流暢なドイツ語でごく普通に会話する大人っぽい学生がいました。それが教育学部7年生だった原口さんでした。

原口さんは、1969年4月に早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修に入学し、4年生になると留学準備のため休学。国鉄の手小荷物扱いの臨時雇用員として働くなどして資金を作り、翌年からケルン大学に留学します。1975年4月に教育学部に復学し、卒業必要単位を揃えるために文学部のあの授業に来ていたのでした。2年間ほどの在独経験でドイツ語をこれほど巧みに使いこなせるようになるものなのか、と強い印象を受けたのを覚えています。

しかし、その後の長いお付き合いの中で分かったことがあります。外国語をよく話す人は、その言語の運用能力を身につけているだけではなく、母語でもよく話す。そして、話すべき内容も持っているのです。原口さんは実に多くの話すべき内容もっています。

1976年3月に教育学部を卒業すると、原口さんは国鉄の外郭団体である財団法人運輸調査局に就職します。原口さんが鉄ちゃんであるのはよく知られていますが、そのような次第でホンモノの鉄ちゃんであることを知る人は少ないかもしれません。交通論の専門家としても商学部で面白い講義ができたのではないのでしょうか。

原口さんはしばしば戯れ口で軍事オタクとも呼ばれますが、右翼やおかしな戦争好きなどとはまったく異なることを強調しておかなくてはなりません。関心の淵源は、子供の頃に身近な戦争体験者から聞いた軍隊の辛さ、戦時下の生活の苦しさ、それらに対して感じた恐怖にあるようです。長じて関連書籍を読み漁る内に、軍隊のあり方や戦争のやり方などには当該文化のあり方が色濃く投影されるという「軍事文化論」の考えに至ったそうです。原口さんは、旧日本軍のエートスは現代日本の政治や社会や大学のよ

うな組織にも継承されていると指摘します。憂慮していると言った方がいいかもしれません。

原口研究室を訪れる人は、棚にぎっしり並んでいる本たちの多様性に驚くだろうと思います。専門の研究書のほか、戦記からサブカルチャーや高校生の生態を論じた本まで各方面に渡っていて、原口さんがいろいろなところに文化の縮図を読み取ろうとしていることが分かります。

運輸調査局に2年勤めたあと、原口さんは1978年4月に早稲田大学大学院文学研究科ドイツ文学専攻に入学します。この年の3月に学部を卒業した私も同じ大学院に進学しました。学部2年生の時に出会った5学年上の上級生と大学院で同期になったわけです。そして、ちょうどその20年後の1998年から商学部の同僚になり、先輩、同期、同僚として半世紀近いお付き合いになりました。

大学院では原口さんはドイツ語学を専攻しました。ケルン大学への留学をきっかけに、地理学よりもドイツ語への関心の方が大きくなって方向転換したそうです。「現代ドイツ語における受動態の研究」で修士論文を仕上げ、その後も「非人称受動態」や「機能動詞」などをテーマにして研究を続けましたが、1989-90年にミュンヘンのゲーテ・インスティトゥートで受けたドイツ語教員のための研修を機に教授法の研究へと針路を定めるようになります。1981年から非常勤講師として東京理科大学や早稲田の理工学部などで教えるうちに、〈なぜ理工系学部でドイツ語なのか〉〈大学のドイツ語とは何か〉〈何のためにドイツ語を学ぶのか〉という問いに向き合うようになっていたところ、この研修が大きな刺激になったそうです。

現在の商学部の「外国語科目選択ガイド」のはしがきは原口さんの文章が元になっています。新入生向けのガイドですが、右のような問いに対する優れた答えにもなっています。ガイドには次のように書かれています。

人間は、狭義の言語的知識と、その言語圏の文化や歴史や社会といった言語外の知識を「判断力、演繹・推論能力などを使って相関させ、整理統合し、解釈することによってはじめてことばを理解し、発信しています。通常はほとんど意識されないこうした脳の働きは、巨大な情報処理プロセスである外国語の学習と運用を通じて確実に身につき、さらに他の分野の勉強や仕事などにも転用が可能です」

かつて、私の知人であるドイツ人医師夫妻は、子供たちをギムナジウムに進学させる

際、ラテン語必修の学校でなければならない、と言っていました。その理由がまさに、ラテン語の学習は「巨大な情報処理プロセス」だから、でした。彼らの子供たちは二人とも立派な医師になっています。

昨年、原口さんは長年取り組んできた教授法研究の集大成とも言えるべき著書『ドイツ語読解法 目標と方法』（早稲田大学出版部）を上梓しました。原口さんの研究の芯や核にあるものを紹介するには、私があれこれ書くより、この本のはしがきとあとがきに書かれた原口さん自身のことを引く方がいいだろうと思います。はしがきではガイドに示された考えが次のように敷衍されています。

「外国語学習の目的としては、その言語圏の社会や文化について知る、教養を深める、あるいは人格の向上などがよく挙げられます。しかしこれらは他の方法でも可能です。これに対して、外国語を学ぶことでしか達成できないのは、通訳や翻訳を介することなくやり取りができる〈直接交渉能力〉の形成です。そこで読むことについて言えば、その正面の目標は〈テキスト内容を自力で理解すること〉です。

それでは何のために読むのでしょうか。理由として挙げられることが多いのは、〈知識の獲得〉です。しかし知識それ自体は無価値です。また多くのことをバラバラに知っていても無意味です。これに対して、読むことから得られる諸知識は、各人がこれを自らの生とのかかわりの中で相互に関連させて初めて、視野の拡大や見識、意見の形成などにとってその意義を全うするというのが筆者の考えです」

原口さんの研究は、こうした意味での読解法・教授法を追究してきたものでありましょう。あとがきでは複数の外国語を学ぶ意義について軍事文化論者らしい視点から論じています。

「今日の日本では、日本語のほかに英語を解する人が増えています。もとよりこれは悪いことではありません。しかし国民の外国語能力と関心が英語ばかりに集中し、国外からの情報や知識などの多くも英語圏からであるという状況は決して好ましいことではありません。なぜならば、各言語や国、文化圏にはそれぞれのもの見方があり、またテキストはその国の政治や経済などの現実的利害にも基づいて書かれるからです。それにもかかわらず、知識の内容や比較、参考の対象が英語圏一辺倒であることは、これらを外国全般と見誤ることにつながり、日本の安全保障という点で危険です」

旧日本陸軍の幹部の多くは英語以外の外国語、とりわけドイツ語の教育を受け、関心

をもっぱらヨーロッパ大陸に向け、ナチスの宣伝に幻惑された。英・米についての知識や関心が乏しく、その結果国際情勢や英・米の国力についての判断を誤ったことを忘れてはならない、と原口さんは指摘しています。

「こうした反省から今日逆に求められるのは、日本対英・米という二極構造にもう一本の比較・検討の柱を立てることによって、知識の偏りを防止し、三者による相互点検と相対化によって知識構造を安定させることです」

これを読んですぐに頭に浮かんだことがあります。2005年10月20日、「日本におけるドイツ年」の行事の一環として早稲田大学においてリヒャルト・ヴァイツゼッカードイツ連邦共和国元大統領の講演が行われました。ヴァイツゼッカー氏は、現代の若者は何を学ぶべきかという政治経済学部の学生の質問に対して即座に「グローバル化の時代に、私たちはみな、とりわけあなた方若い人々は、少なくとも、三つの言語を学び、マスターしなければならないだろうと思います」と答えました。国際関係に文化の果たす役割の重要性を説き、母語、意思疎通のための英語、そして第3の言語を学ばなければならないと学生に語りかけたのです。

1985年5月8日、ヴァイツゼッカー大統領はドイツ連邦議会で戦後40周年の演説を行いました。対立を超え、寛容を求め、歴史に学ぶことを訴えたこの伝説的な演説は「過去に目を閉ざすものは結局のところ現在にも盲目になります」という有名な一節によって広く知られています。早大講演でのことばはこの演説の延長線上で理解されるべきものでありましょう。そしてそれは、言うまでもなく原口さんの読解法研究にも通じています。読解法という単語から単なるハウツーを連想するとすれば見当違いです。原口さんの言う読解法は、ここで紹介してきたような考えに裏打ちされ、自立した学習者を育てるための広い意味での方法論の追究です。

原口研究室のドアの外には「叩扉は強く大きく」と書いた紙が貼られています。原口さんは日本語をとっても大事にする人でもあります。早稲田大学の教旨「学の独立」は、もともと、外国語で講義を行っていた東京大学などに対して日本語で講義を行い、西洋の学問から独立することを意味しています。学問の独立が国の独立に欠かせないことが謳われたのでした。原口さんはこの教旨を深く理解している人でもあります。

「(政策を)お訴えさせていただきます」と選挙運動をして首相になった政治家がいました。あの頃から日本語のバカ丁寧化が加速して、学内でも「学生の入り口は右側にな

ります」(これから右側に変更するのか?)というような表現が目立つようになりました。原口さんとはそんな日本語の話をするのが常でした。

これからも原口さんの関心は多方面に向かい、宮仕えから解放されてできる時間を使ってこれまで以上に多様な書物を渉猟するに違いありません。

原口さん、このような消息でよろしかったでしょうか。

主な研究歴

著書

『ドイツ語読解法 目標と方法』早稲田大学出版, 2020年12月

論文

自立的学習能力の育成に重点を置いた読解教育 — 二・三年次の学習者を対象とする大学ドイツ語読解教育の一例 —

『学習者中心の外国語教育をめざして』三修社, 2004年11月, pp.156-173

Thematische Fokussierung beim Leseverstehenstraining DaF — Auswahl und Anordnung von Texten für fortgeschrittene Anfänger —

NEUE BEITRÄGE ZUR GERMANISTIK. Band 2/Heft 3, Internationale Ausgabe der Doitsu Bungaku. Zeitschrift der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. iudicium. 2003年

第一回目の授業の機能と構成について — 二・三年次の学習者を対象とするドイツ語読解教育の場合 —

『文化論集』〔早稲田商学同公会〕23, pp.71-139, 2003年9月

読解能力の育成に資する教材の選択と配列について — 特定領域集中型読解法によるドイツ語読解教育 —

『文化論集』〔早稲田商学同公会〕20, pp.1-61, 2002年3月

知識からことばへ — ドイツ語読解教育における世界知識の活用について —

『文化論集』〔早稲田商学同公会〕17, pp.39-85, 2000年9月

中級におけるドイツ語読解授業の設計について — 基本的考え方と授業例 —

『文化論集』〔早稲田商学同公会〕15, pp.35-69, 1999年9月

今日の大学におけるドイツ語教育の目標設定とカリキュラムについて — 中級授業改革のための予備的考察として —

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕13号, pp.55-84, 1998年10月

話し手の「視点」と gehen・kommen

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕6, pp.59-77, 1995年3月

〈作業〉を中心としたドイツ語授業について

『ドイツ語教育1992』〔「ドイツ語教育」編集委員会・Goethe-Institut Tokyo / Goethe-Institut Osaka〕, pp.95-110, 1992年5月

調査報告

読解試験と授業の接続

『ドイツ語教育』〔日本独文学会ドイツ語教育部会〕13, pp.43-48, 2008年10月

資料

ドイツ語読解の戦略と戦術(7) — 大学における高等普通教育と外国語教育の意義と機能 —

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕56, pp.259-289, 2019年9月

ドイツ語読解の戦略と戦術(6) — 統合演習 転移編 (食糧問題) —

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕56, pp.115-257, 2019年9月

ドイツ語読解の戦略と戦術(5) — 統合演習 基本編 (人口問題) —

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕53, pp.11-237, 2018年9月

ドイツ語読解の戦略と戦術(4) — 語彙力の拡充 —

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕50, pp.35-178, 2017年3月

ドイツ語読解の戦略と戦術(3) — 文法的戦術(2) 精読時の文法的諸問題 —

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕43・44合併号, pp.23-135, 2014年3月

ドイツ語読解の戦略と戦術(2) — 文法的戦術(1) 定動詞の位置と枠構造／複合文の分割／文成分への分解 —

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕41・42合併号, pp.179-245, 2013年3月

ドイツ語読解の戦略と戦術 (1) — 読解過程／読解の戦略と読解学習の戦略／理解の第一歩としての概要把握 —

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕39・40 合併号, pp.229-291, 2012 年 3 月
失敗に学ぶ — より良き日本語レポート・論文の文体とことば遣いのために —

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕38, pp.123-168, 2011 年 3 月

報告要旨

乏しい語彙でいかに読ませるか

『Waseda Blätter』〔早稲田大学ドイツ語学・文学会〕10, pp.97-102, 2003 年 3 月

書評

有田潤著『ドイツ語学講座第 5 集』『入門ドイツ語冠詞の用法』

『文化論集』〔早稲田商学同攻会〕3, pp.183-193, 1993 年 12 月

荒井 訓